

## 第二夜 人魚姫の殺意

『ぼくはなんてしあわせものだろう。もう決して見つけることができないう思  
っていたいのちのおんじんとこうしてめぐり会えたのだもの。ねえ、きみもぼ  
くのことをいわってくれよう。だれよりもぼくのことを思ってくれよう。きみ  
だもの』

おうじさまのことばを聞いてにんぎよひめは、むねがつぶれそうになりました。  
た。それでもせいっぱいのえがおでおうじさまにうなずいたのです。

ずっとこのお話が嫌いだった。どうして人魚姫は笑ったりできたのだろう。  
大切な人が自分の許を去ろうとしているのに。

どうして人魚姫は王子様を殺せなかったのだろう。彼は別の娘と結婚して自  
分は海の泡となってしまうのに。

子供の頃から嫌いだった『人魚のお姫様』の絵本。そのくせ、何度も何度  
も読み返して、とうにぼろぼろになってしまった絵本。頬を涙が流れた。鼻が  
つんと熱く疼く。たまらず私は絵本を壁に投げつける。パサリと音を立てて絵  
本は口を開いたまま床に倒れ伏した。

私だったら、迷わず王子様を殺す。愛が得られなかったからじゃない。王子  
様が別の娘を愛してしまったからじゃない。ひとりぼっちになるのが怖いから

だ。

のろのろと立ち上がる。夕闇が迫り始めた部屋を横切り壁際に落ちた絵本を拾い上げると胸に抱きしめた。

『ごめんね』

腕の中のその大嫌いな宝物に心の中で詫びを告げた。かざりと絵本が音を立てた。

遠くで教会の鐘が響く。四月に入って随分日の長くなつた夕暮れの路地をユウヤんはご機嫌な足どりで歩いていった。

「そやねん。てつきりハズした思うたら、梓番と馬番のマークシートこすり間違えとつたいいうわけや。お蔭さんでえらい金持ちになつたわ。あ、ちよつと待って」

尻のポケットで秋川雅史が朗々と歌いだす。

「……。おう、ご無沙汰やん。弥生ちゃん元気か？ ……。ええっ、十周年。そないなるか。いつやて？ ……。十一月かだいぶ先やな。よっしや空けとくわ」

電話を切ったユウヤんの足どりはますます弾んで見えた。前方に『酔鏡』の文字が浮かび上がる赤提灯が見え始める。ユウヤんの足どりは心ならずも速ま

り……、並足から、駆け足へ、そして全力疾走にシフトチェンジする。

「ちよつ、ちよつと待てっ……」

路地の反対側から巨体が走ってくる。さながら大映の看板映画、大魔神のよ  
うなシルエツト。夕日を背にした大魔神は不敵な駿足で赤提灯に向かって疾駆  
してくる。ユウやんと酔鏡の距離はわずか二十メートル。倍の距離が開く大魔  
神は恐るるに足らないはずだった。

「いらっしやい」

主人が顔を上げるとバリキが巨体をぬつと滑らせて店の中に入ってきた。後  
ろ手に閉めた格子戸に誰かが飛びついたと見えてけたたましく硝子が音を立  
てた。

「こ、この卑怯者<sup>ひきょうもん</sup>。わしの姿見てダツシュしよったやろ」

格子戸を開けると息を切らせながらユウやんは抗議した。膝と肘に白く擦つ  
た痕があるのはゴール前で転倒したらしい。二十メートルのラストスパートに  
は筆舌に尽くし難いドラマがあつたようだ。

「ほい、一番ビールや。あんたらも飽きもせんとようやるこっちゃ」

笑いながら主人はバリキの前にジョッキを置いた。主人の流儀で店の一番客  
の一杯目は主人の奢りだ。先陣争いの軍配が上がったバリキはご満悦でジョッ  
キを傾けた。

「言うとかけど、あの転倒なしでも俺が勝ったで。ま、運動能力の差やな。普段からもっと鍛えた方がええて」

「やかあし。大将、わしもビールな」

バリキの隣にユウやんが座るやいなや目の前にジョッキが出される手際は相変わらずだ。

「今日の付け出しはちよつと変わってるで」

二人の前に黒い小鉢が並べられる。大葉が一枚敷きつめられた上に白魚のよな魚が載っている。色はごく薄い白で大葉と皿の黒地が透けて見える半透明だ。

「これ何？」

「のれそれ言うねん。あなごの稚魚やな。春らしいと思うて買ってきた。味は付いとるからそのまま食べて」

ユウやんは珍しげに箸で掬い上げるようにしてぬらりとしたのれそれを啜った。

「こら、さつぱりしてて淡白やな。インパクトが強いわけやないけど付け出し向けや。どうも、最近胃の調子がようないらしくてな。時々痛むねん。こういう胃に優しい感じのアテがええなあ」

「ええっ、ユウやん体悪いんか？ 病院行かなあかんやん」

ビールを煽りかけたバリキはジョッキをカウンターに戻して真顔で振り返った。

「なにマジになってるねん。大したことあらへんて。多分、胃酸過多かなんかやる」

「素人判断はあかんて。手遅れになったらどないするねん。酒呑んでる場合やないで」

「あのなあ。手遅れてなんやねん。ちよつと胃が痛いつて世間話しただけやん」  
まるで二人の間合いを計ったように格子戸が開いた。差し込む夕日を背にしてひよろりと背の高い影が店の床に伸びた。

「こんばんは」

ブリーフケースを脇に抱えたセンセが立っていた。今日はチェックのシャツにグレーのカーデイガンを羽織っている。

「おう、センセええとこに来はったわ。大学病院とか顔広いやる。ユウやん、胃が痛むらしいねん。誰ぞええ先生紹介したつてや」

「それはいけませんね」

センセはブリーフケースを脇に置いて座るなり心配げな顔でユウやんを見遣った。

「胃痛を馬鹿にしてはいけませんよ。ともかく検査だけでも受けた方が良くい

しよう」

言うなり携帯電話を取り出す。

「ちよ、ちよっと待ち。おちおち独り言も言われへんな。わし医者には嫌いやねん。医者にかかって病気になった友達何人も見てるで」

「病気になったんやのうて、病気が見つかったんやろうが」  
いつになくバリキは頑なだ。

「かなんなあ。ほなセンチ、後でメール送ってや。気が向いたら行くさかいに。けど、注射はいややで。わし先端恐怖症やもん。あんなもん刺されるくらいやったら死んだ方が……」

「子供かい」

バリキはあきれ顔でビールを煽った。

三人連れのサラリーマンが店に入って来たのを潮に胃痛の話は収まった。

「いらっしやい」

格子戸が開いて今度は背広姿の二人連れが入ってきた。今日の酔鏡はなかなか忙しい。

「釜井さん、こんなことしてたら又部長にどやされますよ」

若い方の男が座りながら言う。

「構うか。今日は店じまいや。生二つな」

釜井と呼ばれた男はふうっと太い息を吐いて背広のポケットから煙草を出す。すくとくわえた。既に呂律が怪しい。

「それよりさっきの道、ほんまに大丈夫か」

「大丈夫です。穴場ですわ。学生時代からいっぺんも捕まったことありませんから」

若い方が黒いキーフォルダを振って見せる。

「すみませんけど、酒出せませんわ」

ジョッキに注ぎかけたビールをシンクに捨てて主人が言った。

「運転してはるんやろ。危ないで」

物言いは柔らかだが主人の言葉には有無をいわせない響きがあった。

「細かいこと言いなや。捕まるも、捕まらんもこっちの自己責任やねんから」

釜井はへらへら笑って場を収めようとしたが却って場は白けきった。

向こう正面の三人組は関わり合いを避けるようにことさらに内輪話に熱を入れ始めた。主人はビールを注ごうとはしない。

「なんやこの店は客に酒出さんのかい」

釜井が恫喝するような声で主人を睨んだ。

「大概にしとき。酒呑んで運転したら危ない言うてはるねん。筋通ってるやん」  
バリキが釜井の方を見ずにぼそりと言った。

「釜井さん出ましょ」

若い方が釜井を促して席を立つ。

「ちよつと待ち。あんたも呑んで来はったんやろ。キーはこの店に預けて行きや」

バリキは若い男を睨んで言った。二人はバリキの巨体を見て怯んだが釜井は引っ込みが付かなくなったらしい。

「なめとんのか」

バリキはぬつと立ち上がった。

「バリキ、なんぼなんでもやり過ぎやで」

止めるユウやんに構わずバリキは釜井の傍らに歩み寄った。

「俺は暴力は嫌いや」

釜井と対照的にバリキの声は静かだった。

「がつきや、やろゆうんかい」

立ち上がりざま釜井は先手を取って右ストレートを繰り出す。意外に喧嘩慣れした動きで腰の入った重い拳に見えたが難なくバリキは掌底でそれをまともに受け止め、そのまま左手で手首を押さえ込んで関節を決めた。

「誰が喧嘩の話してるねん。呑んで運転したら立派な暴力になるやろ。俺はそういう自覚のない暴力が一番嫌いや」

もがく釜井は十秒ともたなかつた。

「わ、わかった。わかったから離してくれ」

「悪いこと言わんから今日は電車で帰れ」

バリキは手を離すと静かに言った。若い男が縋り付くような声で「お勘定」と言う。それには及ばないと主人が言うと言おうとキーフォルダをカウンターに置いて釜井の背中を押すようにして店を出て行った。

「おっちゃん、すんませんでした。騒がしうして。俺、今日はこれで上がるわ」  
バリキは尻のポケットから折り畳んだ五千円札を出してカウンターに置いた。

「釣りはええです。そちらの方にも悪い悪い思いさせてしもたから何か一杯呑んでもろて下さい」

主人が何か言いかけた時、場違いなファンファーレのようにロツキーのテーマが響いた。

バリキは主人を手で制して携帯を取り出す。

「もしもし。はあ……。学は弟ですけど。はあ……。はあ？ 傷害事件ってなんですのん」

バリキの声が瞬時に強張り声が裏返った。

「み、身柄って……。すぐそっち行きますから話はそれからいうことで」

慌ただしく電話を切ると。「すまん、また来る」と言い置いてバリキは店を飛び出した。

『しのぶちゃん来店時。次回来店可能な日時を確認の上連絡乞う。相談あり』  
電報のようなメールが主人の携帯に入ったのは三十分後のことである。バリキと入れ違いに店に来たしのぶは首を傾げながら液晶を見つめた。

「いつでも良いですけど相談って何でしょ」

目の前には熱燗の二合徳利と鶏胸肉の南蛮漬けが並んでいる。銀縁メガネが曇りそうな程の燗酒をふうふう言いながら呑む姿は相変わらず中学生の飲酒のように見えて、そこはかとなく背徳感が漂う。

「あれちゃうか？ さつきバリキの携帯にかかってきよった電話」

向こう正面のユウヤンが焼酎の湯割りを呑みながら言った。

「ああ、傷害事件がどうのと言っていた」

「ええっ、バリキさん傷害事件起こしたんですか。うわっ、被害者の人かわいそう」

「ちやうちやう。バリキの携帯にそういう連絡があつてな。口調からして警察関係ちゃうか、あの電話」

「えっ、警察に追われてるんですか？」

「ちやうちゆうてるねん。弟さんがどうのと言うとったけどな」

「兄弟で捕まらはったんですね。そしたらこのメール刑務所から？ うわっどないしょ、相談って脱獄の手伝いちゃいますのん？」

「勝手に実刑判決下しないな」

まだ何かボケようとするしのぶにユウやんの隣のセンセが口を挿んだ。

「恐らくバリキが相談したい相手は今のしのぶさんじゃない気がします」

「そうそうわしもそれが言いたかってん。相談するんやったら大ボケの方やのうて、シリアスな方ちやうか」

「ひっどお。あたしはいっつもシリアスですう。そやのうてやっぱ脱獄ですわ。あたし刑務所に潜入するために銀行強盗せんとあかんのやわ……。どこの銀行が良いと思います？ けど困ったわ。あたし先端恐怖症なんです。タトウするくらいやったら死んだ方が……」

「勝手に困つとり」

「で、返事どないしょ」

キリがないと見切って主人が割り込んだ。

「あっ、お任せで良いですと伝えて下さい」

しれっとしのぶが言う。十分後、バリキから三日後の午後六時にと返事があった。

「事件の捜査は警察の仕事だったろ」

改札を抜けたバリキの後ろから不貞腐れたような顔でついてくる学まなぶがぼやいた。

「弟を容疑者扱いされて黙っとれるかい」

「容疑者じゃねえって。ただの参考人」

面倒臭そうに言いながら学はバリキの後について階段を降りていく。バリキより頭一つ低く見えるが、そもそもバリキが180センチを超えるガタイなので充分標準的な背丈だろう。ノンブランドのTシャツに腰履きしたジーンズ。足元は茶のローファーだ。

「で、どこに行くの？」

住宅街に入っていくバリキに不安げな声で尋ねる。

「変な宗教団体とかだったら帰るし」

「ちやうて、俺の行きつけの店や」

「こんな住宅街に——と、言いかけた学の目に赤提灯が映った。

「バリキさん」

店の格子戸に手を掛けようとしたバリキを後ろから呼び止める声が出て振り返る。すぐ後ろに銀縁メガネをかけた中学生くらいの少女が立っていた。少

女は馬鹿丁寧にお辞儀をする。桜色のリボンでまとめたポニーテールが白いうなじの上で揺れた。

「しのぶちゃん丁度良かった。今からか？」  
「はい」

バリキ達に続いて彼女も店に入る。バイトにしては若過ぎる。店の娘かなと思っただけだ。

「いらっしやい」

小太りの店主が顔を上げる。店には二人の先客がいた。ひよろりと背の高い男性とパンチパーマの小柄な男だ。

「お待ちしてましたよ」

「遅いやん」

口々に声をかけるところを見ると馴染みらしい。

「俺が相談にのってくれ言うたんはしのぶちゃんだけやねんけどな。あつ、しのぶちゃん今日は俺の奢りやから好きなもの頼んで」

言いながら、バリキがパンチの隣に座ったので学はその横に腰を下ろした。娘はどういうわけかカウンター隣の隅に座ってしまった。

「そんな、私人様の相談に乗れるような知識も経験もありませんし……」  
眼鏡の奥で一重の小さな目がおどおど動く。

「ましてやご馳走して戴ける程、き、期待に応えるなんてとても……」

『無理です』と声は尻すぼみになる。

「かまへんて。話聞いてもらうだけでもええねんから」

「でも……」

「ほんまにかまへんて、何呑む」

まだ逡巡するしのぶを見て学はイラつときた。とろそうな女やな。俺やっば年下は無理。そんな考えがよぎった。えっ？ 呑む？

「えと、あのじゃあ熱燭をお願いします」

答えた少女をぎよっとした目で見ながらバリキの肘を突つくと小声で囁いた。

「兄貴、未成年に酒はまずいって」

「やっぱりお前もそうきたか？ 無理もないけどな、こう見えてしのぶちゃんは二十歳で、れっきとした大人や。お前、四月生まれやから三カ月も年上やねんで」

「冗談」

「しかも大学で事務の仕事してはるOLや。学生のお前よりよっぽど呑む資格がある」

雪平でつけた熱燭の徳利がしのぶの前に置かれる。意を決したようにしのぶ

は徳利をぐつと傾けて猪口に一杯目を注いだ。白い縁に小さな唇をあてがうと一息に煽る。微かにその目尻に朱が差したように見えた。

「で、今更どういう相談ですんやろ」

甲高い声が店に響いた。学は慌てて後ろを振り返ったが無論誰もいない。学は改めてしのぶの口元をまじまじと見つめた。

「どこの刑務所に入ってはるんやろとか。同じところ入る思うたらどこの銀行襲たらええのやろとか。日本の裁判は時間かかるからドラマみたいにはスムーズにいかんのとちやうやろとか悩んでたのに。とつと脱獄してきはるんやもん。あたしの立場は……」

「ちよつ、ちよつと待ち。なんの話やねん」

「だから、プリズンブレイク」

「しのぶちゃんは黙つとり。話がややこしくなるだけや。まずバリキの話聞こや」

ユウヤんが仕切る。

「おおきに。改めて紹介するわ。弟の学や。京大の二回生やで」

「げっ、鳶が鷹言うか、遺伝子操作言うか兄弟でこの差はただごとやないで」  
ユウヤんが仰け反る。

「何を専攻されているんですか」

センスが尋ねる。

「バイオテクノロジーに関連を考えてます」

「ええっ、あのゾンビが出てくるゲーム？」

しのぶが頓狂な声を上げる。

「そらバイオハザードや」

面倒臭そうにユウやんがツッコむ。

「そか、じゃあキノコ食べて大きくなる」

「マリオブラザーズって離れて行ってるて」

学は二人の掛け合いには無関心で付け出しの小鉢を箸で突っいている。

「あっ、お前蓮根嫌いやったな」

小鉢には蓮根をスライスして素揚げにしただけの手抜き料理に見える肴が盛られている。

「騙された思うて一口食べてみ」

主人がじつと学を見て言った。学はしぶしぶ箸で一枚摘んで口に入れた。蓮根は口の中でさくりと砕けて、独特の香ばしい風味が鼻をついた。

「薄くスライスした蓮根をにんにく醤油に漬けて揚げてるねん。単純やけど旨いやろ」

主人はにっと笑った。認めるのは癪だったが後を引く味に引きずられてあつ

と言う間に小鉢は空になる。

「初来店の大サービスや」

名残惜しそうにしている学の前に主人は同じ小鉢を出した。

「あつ、すみません」

素直な礼の言葉がするりと口をついて出たのが自分でも意外だった。少し気分が解れた。

「こいつの友達がな、この前の日曜日に自分のマンションで刺されたそうやねん。ところが、頼んない京都府警は第一発見者のこいつを容疑者にしてしまひよった」

「ただの参考人だつてるだろ」

面倒臭そうに言っつて学は顔を上げた。

「すみません。粗忽な兄貴で。俺、別に犯人扱いされたわけじゃないんですよ。

まあ、第一発見者ですから、突っ込んだ質問はされたけど。それをただの身元確認の電話なのに身柄引き受けと勘違いして、すっ飛んで来るし。今日も相談にのってくれる人がいるから詳しいこと説明してくれつて言われてついで来たんですけど。こんな大げさなことになってるやなんて……」

「まあ、そこはバリキの弟思いから出たことですから」

ひよろりと背の高い男がやおら立ち上がると歩きながら話しだした。

「それに今日のメンバーに私が入っていたのはラッキーだったと思いますよ。申し遅れましたが私、大学で物理学を教えています。皆からはセンセと呼ばれています。ただそれは仮の姿。学内で起こる失せ物、いざこざを快刀乱麻を断つ如く解決する。人呼んで」

センセの指が学の鼻先で止まる。

「理学棟のホームズ」

「まあセンセの与太は置いといてわしがおるから安心し」  
ユウやんが割り込んだ。

「競馬の神さんと呼ばれたわしの勘は天下一品や。この事件の犯人もぴたりと当てたるで」

「いや、当てものじゃないし」

「あのう、めつちや基本的なこと聞いて良いですか」

しのぶが生徒のように手を挙げた。

「はい、しのぶさん」

すかさずセンセが当てる。

「傷害事件なんですよね。いうことは被害者の方は生きてはるわけで、その人が学さんを犯人やないと言うたら終わりちやいますか？」  
もつともな意見である。

「そもいかないんですよ。被害に遭ったのは佐橋さばしいうやつなんですけどね。正面から腹刺されてかなり危なかったんですわ。今は安定しているらしいけどまだ面会謝絶。それに、警察の説明だと事件前後の記憶をなくしてて犯人のことも覚えてないそうです」

「うわっ、またベタな展開やな。そないなドラマみたいなことホンマにあるんかいな」

「さあ」

学も首を捻るしかない。

「ともかく集まってもろたんんやし。何があったか説明してくれや」  
バリキに促されて学が口を開きかけた時ロツキーのテーマが鳴り響いた。

「おう本田か。……ええ？ グラブ？ ちよつと待ってや」

足元のボストンバッグを探る。

「おっ、ホンマやすまんすまん」

一頻り話して携帯を切るとバリキは立ち上がった。

「連れのグラブ間違えて持ってきてしもた。ちよつと持って行って来るから始めといて」

言うだけ言うと店を飛び出して行った。

「すみません。落ち着きのない兄貴で」

「でも、私に言わせれば弟思いだし、気の良い青年だと思いますよ」

「つか、頭堅いっしょ。言い出したら。人の言うこと聞いてないし……」

「確かに。ちよつと胃が痛い言うただけで病院行きの検査受けるのしつこく言うし、飲酒運転のサラリーマンの件もやりすぎや。いつか大怪我するんちゃうかところちがハラハラするわ」

ユウやんが二人組との悶着を説明した。

「あーあ。相変わらず馬鹿だ」

言葉とは裏腹に学は酸っぱいものでも口に含んだような顔になった。

「俺が二歳の時、お袋が飲酒運転の車に撥ねられて死んだんですわ。気持ちはおわかるけど誰彼かまわず喧嘩売るような真似してたら身がもちませんよね。ほんとに、馬鹿だ」

「お父さんは健在なんですか」

「胃癌で死にました。医者嫌いで検査受けた時は手遅れだったそうです」

「どうやら先日バリキは立て続けにトラウマを引いてしまったらしい。」

「ま、そう言われたら病院行け言われたことかて悪気があったわけやなし邪険にしたわしの方が悪かってんけどな」

「けど、悪気がないって一番質の悪いキャラだと思いませんか？ 親父が死んだ時兄貴は二十歳で高専卒業したばかりでした。親代わりになったつもりかし

らんけど、俺の学資捻出するため高いギャラ取って試合の助っ人のバイトやってみたり、今度の事件でも子供扱いされて、悪気がない分正直しんどいです」  
一頻り言って学はハッと顔を上げた。

「すみません。初対面で愚痴聞かせてしまっただけでも、喋ったら少しすっきりしました」

ジョッキを空にして二杯目を頼むと学はメニューを探した。主人の後ろのホワイトボードには

お品書き

春が来た

と書かれていた。

「今日は春らしいもんをいろいろ揃えましたというこっちゃ。お勧めで一品出させてもろてええかな」

主人の言葉にお願いしますと学は答えた。ユウやんが揚げ物を、センセが何かさっぱりしたもの、しのぶが魚料理を頼んだ。

「脱線してすみません。事件の話します」

自己紹介をした時はふざけたり冷やかしていた客達が学の愚痴には口も挿

まず黙って聞いてくれた。バリキと常連達の信頼関係が学にも伝わってきて学は彼らに好感を持ち始めていた。

「ことの起こりは、この葉書なんです」

学は後ろに置いたリュックから一枚の葉書を取り出した。客達が集まってきて覗き込む。

「クセのある字やなあ、ええと。京都市左京区……、えっ、松崎って？」

「俺らの名字ですけど。あれ？ 兄貴から名字聞いてませんか？」

「いや、みんなバリキとしか呼ばへんから」

「差出人の住所も左京区やな。名前は佐橋……、下の名前、クセがきつくて読めんで」

「あー」

ユウやんの後ろで背伸びをしながら覗き込んでいたしのぶが片手を挙げていた。

「はい、しのぶさん」

「裏側に差出人の方の住所と名前が印刷されてるんちゃいます？」

「なんやて、どれどれ」

ユウやんが葉書をひっくり返す。

「あ、ホンマや。なんやこれ引越しましたのお知らせかいな」

葉書の裏側にありふれた転居案内の文面が印刷されていた。

「ええと、『さばしさとる』でええんかな。佐橋ってさっき言うてた被害者か？」  
ユウやんは名前の覚えが速い。

「裏が印刷やてようわかったな」

「へへへ」

しのぶが妙な笑い方をした。

「あつ、またしようもないこと言う気やろ」

「ちやいますて。ただの勘ですけど、表書きが手書きやからダイレクトメールではないなあと考えて。最近葉書ももらうこと少ないじゃないですか。お年賀や暑中見舞いの頃でなかったら『結婚しました』か『赤ちゃん生まれました』か『引越しました』くらいかなあと。で学生さんやったら『引越しました』の可能性が高いんちゃうかと思うたんです」

「お、マトモやん」

「どうもギャグはスランプで……」

残念がるしのぶを放っておいてセンセが尋ねた。

「で、この葉書が事件に関係するんですね」

「いえ、ぜんぜん関係ありません」

吉本新喜劇なら総コケするようなボケ方である。

「ようわからんなあ。関係ないんやったら、わしらに見せた意味あらへんのちやうん」

「まあ雰囲気作りつか、サスペンス劇場とかだとそれらしい小道具が出てくるじゃないですか。現場の遺留品とか謎の手紙とか。警察がそんなん貸してくれるわけないし。手ぶらも味気ないしなあって」

「やっぱバリキの弟やなどと口々にぼやきながら常連たちは自分の席に戻った。」

「けど、この葉書が来てなかったら俺が事件に巻き込まれることもなかったというのはほんとです」

「言って学は話し始めた。」

＊

「おう、なんぞ食うもんじゃないか。今月金欠でな、食料が底ついて……」

悪友の篠原が熊みたいな低音で唸りながら遠慮なしに扉を開けて入ってきた。

「ふおい……」

学は振り返るのも億劫気に生返事をした。ゆるゆると振り返った学の情けない目を見て来る場所を間違えたとは悟ったのか篠原はみなまで言わず口を噤んだ。

「しかし、きつちやない部屋やなあ。ちつとは片付けや」

篠原は床に散乱するレポートの束や参考書を掻き分けて自分の座るスペースを作った。

「どこかに食料でも残ってないかいな」

レポートをひっくり返して覗く仕種がいじましい。

「ん？ なんやこれ」

篠原は参考書の下から一枚の葉書を引っ張り出した。

「ええと、引っ越しました……。なんやお前、佐橋と仲良えのんか」

「ふえ」

相変わらず生返事の学は葉書を覗き込んだ。

「ああこれか、まるきり知らん。こいつ誰やって首ひねってたとこや」

「やるな、学科は一緒やけど地味で存在感ないもん。受講は模範的で授業をサボったりはせんから、いっつも教室にいてるんやけど目立たへんねん。……、  
そう言えば俺のところにこの葉書来とったな。もしかして学科の連中全員に出したんかいな。律儀なやつちや」

学科の学生は四十人ばかりいる。律儀というより気の回し方がズレている気がする。

「お近くにお越しの際には是非お立ち寄り下さい——か。」

常套句の文面を読んで篠原がにと笑った。

「ほな、立ち寄らせてもらいに行こか」

笑っている顔が既に意地汚い。

「つて、この佐橋のこと知らのんちやうん」

「これからお友達になればええやん。山野の話によると佐橋が誰かと喋ってる  
とこてほとんど見たことないらしい。社交性限りなくゼロや」

「あのな。厚かましいにも！」

「学、その社交性のない奴がこうやって積極的にアプローチしてきてるんやで。  
その気持ちを汲んでやらんでどうする。それにな、佐橋はどこぞの会社役員の  
御曹司やそうや」

熱弁をふるう篠原に引き摺られるようにして学は下宿から出た。掃き残され  
た桜の花びらを踏みながら、葉桜並木の下を二人は歩いて行った。

\*

「で、俺は携帯持ってないから篠原にかけてもらって佐橋がいるのを確かめた  
上で、今から遊びに行くって押しかけたんです」

学は鱈の焼き物をほぐしながら言った。西京焼きのアレンジで西京味噌に木  
の芽が和えてある。口に入れるとすつと冷たくなるような独特の風味が小気味  
良い。和風ペパミントと言ったところか。

「すまん、すまん。ダッシュで帰って来てんけどどこまで話した？」  
そこへバリキも戻ってきたので学は続けた。

\*

「ヴィラ・サングって、ここでええよな」

二人は巨大な高層マンションの前で立ちすくんでいた。

「2609号ってホテルの部屋番号みたいなやから変やなあと思ってたんやけどこの最上階やんか。ホンマ入るんか」

学は既にマンションに気圧されて腰が引けている。目の前にはオートロックの自動ドアが立ち塞がっている。

「いや物は考えようや。晩飯一回くらい奢ってもらっても心苦しくない気がするきた」

篠原は何の躊躇いもなくインターフォンを鳴らした。暫く間があって、

「はい」

と、なんだか頼りない返事があつた。

「篠原です、同じ学科の。引越しましたの葉書もろたんで遊びに来ました」

「恥ずかしいやつちゃな」

学が呟く。

「あ、ああ、今開けます」

ふためくような声に続いてずっと自動ドアが開いた。躊躇いなくエレベーターに向かう篠原に続いて学はマンションに入った。

「遊びに来てくれたのは、君たちが初めてなんだ」

おどおどびくびくした声音で、それでも嬉しそうに佐橋は迎え入れてくれた。なるほど人見知りか、それがそうだなと学は思った。しかし、部屋の中身も圧巻である。3LDKで無駄に広い。サイドボード、液晶テレビ、オーディオ一式、でかい冷蔵庫にでかいキッチン……こいつ所帯持ちか。

「食べるものがほとんどないんだよね。お酒はあるんだけど」

言いながらキッチンに回り込む佐橋に「お構いなく」と言いながらいそいそと篠原が付き従う。

「おっ、チーズやらハムやら良えもんがぎょうさんあるやん」

「うん。でも僕、料理全然だめなんだよ」

「ハムやチーズに料理はいらんやろ」

居酒屋でバイトをしている篠原が手際よく大皿に盛り付けて即席のオードブルを作った。

「これだけだったらお腹空くよね。そうだ、ピザ取ろうよ。好きなの選んで」  
ピザ屋の広告を二人に渡すと、佐橋はサイドボードの上のコードレスホンに

手を伸ばした。

「あつ、ピザの出前をお願いします。ええと、トリプルミートスペシャルのLサイズと……、あ、ちよつと待って下さい」

広告を左手に持って注文をする佐橋はそのままキッチンに回って冷蔵庫の脇に貼ってあった小さなメモを取ってきた。

「住所は左京区……」

電話を終えた。佐橋はメモを戻しながら「まだ、住所が覚えられないんだよね」と、はにかむように笑った。

ガラステーブルに大皿を置き、サイドボードから出されたスコッチでグラスを満たして三人は酒宴を始めた。

「けどなんやな。こないでかい家に住んで落ち着かんことないか」

ショットグラスでストレートのブランタインを煽る篠原の舌は滑らかである。

「うん。でももう慣れちゃったかな」

「そっか、引越しましたの葉書もろたん3月の末やもんなあ。篠原とさつき話しててん。あの葉書って学科全員に送ったんかなあて」

「うん。それが礼儀かなって。でも、ほんとに遊びに来る人がいるとは思ってなかったからびっくりしちやっただけ」

学と篠原は曖昧に笑った。水割りをちびちび舐めている佐橋の口調は少しずつ滑らかになってきたようだ。

「けどここ、家賃が馬鹿にならんやろ？ やっぱ親父さん持ちか」

「父さんは関係ないよ。元々親の世話になりたくなくて引っ越したんだから。家族にはこの住所も知らせてないし。一昨年、お婆ちゃんが亡くなってね。僕も遺産を相続したからそれで賄ってるんだ」

佐橋はウイスキーを次ぎ足しながら言う。

「両親と言っても今の父さんは母さんの再婚相手なんだ。本当の父さんは小学生の時に病気で死んだ。今の父さんには息子が二人いて再婚した時いきなりうちは五人家族になったんだ。父さんはめったに家にいないし、いても会話のない人なんだよね。義兄さん達同士は仲良くしてるけど僕にはよそよそしくて滅多に話しかけてこない。母さんもあの人達に遠慮してるんだろけど、壁一枚向こうから話しかけてくるみたいないな感じ。僕、家の中に居場所がなくなっちゃったんだ」

「けど、お互いに遠慮のし合いっこしてる言うこともあるんちゃう。もうちょっと歩み寄ってみたら……」

「君はあの人達のことを知らないからそんなことが言えるんだよ」  
佐橋はぼそつと言って俯いた。

「ま、誰にかて触れられたくないことはあるわな」

学が取りなして大学の話題に切り換えた。厭味な教授に対する鬱憤、来週の試験のヤマ、篠原のバイトの役得、コンパでの失敗話。佐橋はどうも第一印象で損をしているだけだと学と篠原は気付いた。サシで吞めばごく普通の男だった。

「おわっ」

トイレに立った篠原が洗面所で妙な声を上げた。『どないしたん』学と佐橋が覗き込む。

「どうでもええこつちやけど、この歯ブラシ勿体なくないか」

見ると空っぽのゴミ箱にどう見ても下ろして間もない歯ブラシが一本転がっていた。

「あ、それは色が気に入らなくて買い直したんだ」

赤い柄の歯ブラシから目を上げて洗面台を見ると色違いの緑色の歯ブラシが立っていた。

「ま、人それぞれやわな」

としか、言いようがない。

「それだけちゃうねん。見たって」

洗面台の横を見るとコードレスホンが立ててある。篠原が指さす先を見ると

ユニットバスにも電話があった。

「これはいらんのちゃうん？」

「でも、お風呂に入ってる時に電話がかかってくるかもしれないし」  
いらん心配やと二人は呆れた。

「ちなみにそっちの部屋は何？」

「そこは開かずの間。物置に使ってて普段は鍵をかけてる」

照れくさそうな顔で佐橋はしれつと言った。やっぱり普通の男とは言い難い  
か――。

\*

「結局、ボトル二本空けて、その晩は佐橋の部屋で雑魚寝したんです。あつ、  
何かウイスキーあります？」

話を中断して学は主人に尋ねた。

「豪快なことしよるなあ。初めて行ったクラスメイトの部屋でそこまでたかる  
か」

ユウヤんが呆れたように言う。

「それだけ盛り上がったんですよ」

「バーボンやったらあるな。メジャーやないけど旨いで」

主人が冷蔵庫からボトルを一本出した。

「……クレメンタイン」

学がラベルを指でなぞる。

「クセが強くないから飲み易いと思う」

学はシングルのストレートで頼んだ。主人はショットグラスに1フィンガー  
注ぎタンブラーにチェイサーを入れて添えた。

「おっちゃん、俺も同じやつとなんか合いそうなアテ頼むわ」  
バリキが言った。

「で、それからどうなったんですか？」

センセに急かされて学は続きを話し出した。

「そこまでご馳走になってお返しなし言うわけにもいかんし、次の日曜に予定  
してた女子大の子らとのハイキングに誘ったんですよ。丁度、男が一人足りな  
くて、アテはあったけどまだ声かけてなかったし」

「ハイキングか、ええ響きやなあ。なんや、コンパというと不純異性交遊って  
感じやけどハイキングっていうたら青春で感じがするわ」

ユウヤんが妙な感想を述べる。

「で、佐橋に話したらえらい乗り気ですぐに話は決まったんです」

「このバーボン旨いやん。お前にはもつたいないわ。その女子大の幹事っても  
しかしてあの娘か？ この前言うと思った遥はるかちゃん」

「やかまし」

「ええと、確か今どき携帯も持たん古風な娘で……」

「わっ、言うな」

正月に戻った時、酔った勢いで本命をばらしたのは近年稀に見る痛恨事である。バリキは面白がって意図的に吞ませたようで学は何を喋ったかまるで覚えていなかった。

「えっ、学さん好きな娘がいてはるんですか？ ええなあ、青春やなあ」

しのぶが言うのと近所のおばちゃんの間話に聞こえる。

「ともかく、次の日目が覚めたら実はもう夕方近かったんですけどそれから佐橋のマンション出て帰りしなに遙ちゃんに佐橋のこと電話で伝えときました」  
学は気を持たせるようにウイスキーを一口呑んだ。

「ところが当日の朝になってアクシデントの応酬くらったんですよ」

学とバリキの前に黒色の四角い塊が入った小鉢が置かれた。

「チェダーボードーや。アイルランドのチーズに黒ビールを練り込んだもんやな。少しずつ崩して食べて」

さっそくバリキが箸を入れて口に運ぶ。

「お、こら良えわ。酸味と渋みのバランスが絶妙やん。それに少しずつ、箸で崩しながら舐めるように食べられるから長持ちしそうや」

「で、アクシデントというのは」

続きが気になるセンスはタラの芽の天ぷらを口に運びながら急かせる。濃いめの天つゆで食べる一品は今月売り出しの甑こしきだお倒しによく合っているようだ。

「遙ちゃんのお婆さんの具合が悪くなってドタキャンされたんです。事情が事情だからしょうがないんですけど、テンション下がりがりまくってるよ。一人の子がハイヒールで来よってどないするねんって騒ぎになって、別の子はやっぱ虫がおるとこ行くのはいやや言い出すしまつで。とどめは時間を過ぎてても佐橋が来なかつたことですよ」

言つて学はウイスキーを煽つた。

「そもそも佐橋が来ることが遙ちゃんから伝わってなかつたらしくて、『全員揃たし行こか』言うところに俺と篠原が水差したみたいなき感じになってテンションだだ下がり。みんな普段からは考えられんような早起きして出てきてるわけでも立ってる。おまけに篠原が電話しても出ないし、『ほつといて行こ』言う雰囲気になったんですけど、俺なんかしつくりこなかつたんです。金曜に呑んだ時の様子からしてもそんなええ加減なやつに思えないし。これ、異常事態ちやうかつて。で、後を篠原に任せてマンションに向かつたんです」

「そしたら、佐橋君が倒れてたいうわけか」

「はい」

\*

「すみません。2609号の佐橋の友人なんです。連絡が取れないんです。オートロック開けてもらえませんか」

何か書き物をしていた初老の管理人が面倒臭そうに顔を上げた。

「両親か、親族の委任状持ってはりますか」

如何にも融通の利かなさそうな横柄な態度。

「そんなん持ってません。けど約束してたのに来なくて、もしかしたら中で倒れとるかも知れへんです」

「あんたドラマの見過ぎやで」

無根拠な<sup>い</sup>応えを返して管理人は又俯いた。

「ほな、一緒に来て下さい」

「まだ巡回の時間やないからな。ここを動かれへんのだ。次の巡回は十時やさかい待つとり」

下手に出ていた学もキレて強硬手段に出かかったが丁度その時、間の良いところにオートロックの中から小学生が飛び出してきた。機を逃さず中に飛び込む。

「こら、何しよるねん。不法侵入やぞ」

管理人の声を尻目に学はエレベータに飛び乗った。

佐橋の部屋のドアに手を掛けた時の感触を学ははっきり憶えている。ノブを

回すとドアは何の抵抗もなく開いた。その日はハイキング日和の好天で九時を過ぎたその時刻には気温も上がっていたはずだ。にも関わらずドアを開いた瞬間、氷水の中に手を突っ込んでしまったように冷たい空気を感じた。三和土に入った瞬間、何故か身震いがした。

佐橋は玄関を入ってすぐ、リビングに続く廊下で頭をリビングの方に向けてうつ伏せに倒れているのが見えた。腹の辺りから血が床に広がっていて尋常ではない状況であることは一目瞭然だった。一階に戻ろうかと考えたが急を要することは明らかで、あの管理人と不毛な問答をしている場合ではないと考えた。

意を決して靴を脱ぐとリビングに入って警察に通報し救急車も頼んだ。受話器の指紋が気になったがどうせ金曜日にはベタベタ付けまくっていたはずと自分を納得させた。警察を待つまで少し暇がある。電話の横のペン立てからボールペンを二本抜くと佐橋のところ引き返した。倒れている佐橋の脇にコンビニの袋が転がっていてどうも気になっていたのだ。ボールペンを突っ込んで中を覗いた。封の開いていない食パンと牛乳、濡れて袋にへばりついていたらシートを苦労して剥がし打刻を読んだ。その日の六時十分となっていた。そつとボールペンを抜く。遠くからサイレンが近づいてきた。

\*

「たいしたもんや。その状況でようそれだけ冷静に対応できたなあ。さすが京

大生、兄貴とは偉い違いや」

筈の土佐煮を突つきながらユウヤんが感心する。

「いえ、全然冷静じゃなかったです。袋覗いてたこともバレてえらい絞られたし」

「昔っからお前の悪いクセや。好奇心に負けてすぐいらんことに首突っ込むやろ。おとなしくパトカー待ってたらええやないか」

「けどなんでバレたんやろ」

「あの、もしかしてボールペンの先の方を突っ込まはったんとちやいます？それやったらどない注意してもインクが付いた可能性がありますよ」

猪口に酒を移しながらしのぶが言った。

「あっ」

「その袋に触った可能性のある人って四人しかいませんやん。お店の人と佐橋さんと犯人と学さん。お店の人と佐橋さんはボールペン突っ込むはずないですから、残るんは犯人か学さん。もしや犯人と学さんが同一人物ちやうかと警察は疑ったんちやいます？」

「なんや今日のしのぶちゃんまともやなあ。しょうもない駄洒落が飛んで来るんちやうかと身構えてるのに肩透かしばかりや」

ユウヤんが呆れる。

「だから、スランプなんですよ」

しのぶが妙に残念がる。

「で、それからどうなったんです」

「犯行時刻は六時半から七時頃やったらしいです。直接教えてもろたわけやないんですけど、その時間帯中心にアリバイ聞かれましたから。俺も篠原も早起きの自信なかったから七時に駅前の喫茶店で待ち合わせて計画のおさらいしてたんですわ。それが証明されて無罪放免です」

「篠原さんの証言だけでは弱いでしょうけど店員の誰かが憶えていたんですかね」

「ん？ ちよっと待ち。言うことは弟の無実を晴らすいうバリキの相談事はどうなるねん」

「あれ？」

バリキが首を捻る。今頃になってようやく情報の整理ができたらしい。

「あれやないで。すんません粗忽な兄で」

「まあ、そない言いなや。俺も多少パニックってたし」

多少ではないとバリキ以外の全員が考えた。

「けどせっかく集まってくれてるんやし、意見聞かせてくれへんやろか。学、他に何か情報持ってないんか？ 警察で聞いたこととか」

「あのなあ、『重要』が付いてないけど仮にも参考人やで。警察がほいほい手の内見せるはずないやろ」

しのぶは猪口の酒を煽ると学に反論した。

「けど、普通何かあるんとちやいます？ その篠原さんのお父さんが実は府警の刑事さんやとか、佐橋さんのお父さんが警察に絶大な影響力があって『この事件は府警に任せとかれまへん。学はん、君の明晰な頭脳を見込んで正式に事件の解明を依頼しま。情報が必要やったらなんぼも言うておくれやす』って言われたとか」

「それのどこが普通やねん」

もはや、ユウやん以外誰も相手にしない。

「けど、話が進みませんやん。サスペンス劇場でもこないな地味な展開やったら視聴率取れませんか。あつ、もつとええこと考えた」

カウンターの面々は耳を塞ぎにかかった。

「遙さんは実は府警の新米刑事と付き合うてはるんですよ。男勝りで正義感の強い彼女はお尻に敷いてる新米くんから強引に捜査情報を聞き出すんです。で、独自に捜査を始めるねんけど手詰まりになる。そこで、自分に気いのある京大生を巻き込んで打開を図るわけですわ。一人の女子大生を競り合っただけとこ見せようとする恋のライバル同士。揺れる女心。そこへ第二の事件が狙いますま

したみたい。に十時のCM前に起きるんですわ。学さん、心当たりあるでしょ？」  
「ないない」

「今度も返事をしたのはユウやんだった。」

「バリキは何か意見はないのですか」

「天ぷらをあらかた片付けたセンセは名残惜しそうに天つゆで冷酒を呑んでいる。」

「そんなん考えられるくらいやったら相談もちかけてないて」

「わし、思うんやけど」

「ユウやんが笛を口に入れたままもごもご言った。」

「これって単なる強盗未遂事件なんちゃうやろか」

「オートロック付きのマンションやで。そう簡単に入られへんやろ」

「学くんかて入れたやん。ようある話やけどコンビニから佐橋くんを尾けてきた犯人が住人を装ってエレベーターに乗り込むわけや。で、別の部屋の戸を開けるふりして佐橋君が自分の部屋を開けた途端一緒に押し入って『金を出せ』言う寸法やな。二人は揉み合いになって犯人のナイフが佐橋君の腹に刺さってしもうた。泡喰った犯人は何も盗らずに逃げたというわけや。間違いない、わしの勘がこの事件は単純な物取りやと言うてる」  
「あっ」

学が声を上げる。

「な、説得力あるやろ」

「いえ、言い忘れてたことがあります。凶器は佐橋の脇に転がっていたんで俺も見たんです。あれはキッチンにあった包丁です。ですから、犯人は佐橋より先に部屋に入っていないとおかしいし、部屋の間取りやどこに何があるか分かってる人間だと思います」

出端を挫かれてユウやんはうーんと考え込んでしまった。すぐ隣のセンセがすつくと立ち上がる。

「所詮、競馬の勘ごときではこの事件は荷が重すぎます。理学棟のホームズの推理が炸裂する時が来たようですね」

意味不明の日本語で、高らかに推理宣言するとセンセは手を後ろに組んで歩き始めた。

「凶器や犯行状況からして犯人は普段からこのマンションに出入りしていて事件当日も佐橋君が躊躇なく部屋の中に招き入れる人物でなくてはいけません。少なくとも今我々が知り得た情報の中ではそういった人物は四人だけです。佐橋君のご両親と二人の義兄。家族の中に犯人がいることは間違いありません」

「けど、学が言うよったやん。引っ越し先は家族へも知らせてないて」

チッ、チッ、チッ。センセが顔の前で人指し指のワイパーを振る。

「そんな高級マンションに保証人なしに入居できるわけないでしょう。しかも佐橋君は二回生で今は四月ですよ。恐らく未成年だ」

「病院で……」

学が割り込んだ。

「佐橋の家族の方と少し話をしました。佐橋が家の中で孤立してる言うのは、やっぱり佐橋の思い込みいか、一人相撲だったみたいですよ。四人とも普通の人らで、もちろん佐橋が妙に構えてるのも気付いていて何年もそれをほぐそうと苦労されてたみたいでした」

「そういう腫れ物に触るような気遣いは時に人の心をますます頑なにしていまいます。で、気遣う方は『どうして私の気持ちが変わらないんだ』と気遣いを憎悪に変化させることもまたありがちなことです」

したり顔でセンセが頷く。

「そういうことじゃなくて。家族とのしこりは勘違いみたいでしたけど、引越しを知らせてなかったのはほんとだったんですわ」

センセの足が止まった。

「そのお婆さん筋の親戚が保証人になってくれてたみたいです。佐橋はえらいお婆ちゃん子だったみたいで相談を持ちかけたら『悟はんももうすぐ二十歳や。一人立ちして当たり前でっしやる』とかいうわけのわからん理屈で実家には内

緒で。どうも確執があるのは、佐橋のお母さんとその親戚の方みたいです。なので、佐橋の家族は誰も新しい住所も知らないしもちろん行ったこともないそうです」

「しかし、それは表面的なことでしょう」  
センセは粘る。

「その親戚が後から家族に伝えたということは充分考えられる」  
「それはどうやらか」

センセの反撃を黙って聞いていた主人が口を開いた。客達は普段は料理以外のことでほとんど口を挿まない寡黙な店主の突然の乱入にまじまじとその口元を見つめた。

「事件があったら、まずその身内は徹底的に調べられる。『息子の引越したことは知りませんでした』というのが嘘やったらすぐバレてしまうやろうし、バレたら後ろ暗いことがあるんちゃうかて、もつと追求されるで。事件に進展がないこと自体、家族の方が言うてはることがホンマや言う証拠やないかな」  
ユウやんに続いてセンセが、うーんと考え込みながら席に戻らざるを得なかった。

「あくまでも可能性の話やから、氣い悪うせんと聞いてや」  
主人が生真面目な口調で続けた。

「篠原君が金曜の晩に君んどこに遊びに行ったんは偶然やろか？　佐橋君の葉書を見つけたこと、成り行きで佐橋君にご馳走になったこと、成り行きでハイキングに誘ったこと、日曜の朝にいつまでも来うへん佐橋君を気にして君がマンショまで行ったこと、結果佐橋くんが早う発見されて犯行時刻が絞られたこと。これ全部、偶然やろか？」

「ええっ？　篠原犯人説ですか？」

「もし、篠原君が佐橋君になんぞ恨みでも持ってたとしたらどうやろ。今言うたことは偶然でもなんでもなくて篠原くんが書いた筋書きやったとは考えられへんやろか」

「いやいやいや、篠原とは一年の頃からの付き合いですけどそういう緻密な計画が練れるキャラやないですて」

戸惑いながら学が言う。

「いや計画的である必要はないねん。どれか一つでも予定が狂ったら決行を見送れば済む話や。筋書き通りになってもならんでも事件が起きるまでは何の問題もない。ポイントは警察に犯行時刻を絞らせること。アリバイができて助かったんは篠原君も一緒やで」

「けどなあ、そもそも金曜の夜、篠原と佐橋はまるで初対面でしたよ。ドア開けた瞬間に佐橋がきよんとしてましたもん」

「けど、おっちゃん言うてることにも一理ある気がするなあ」  
バリキが考え考えた。言いながら三杯目のバーボンを注文する。  
「佐橋君に覚えがないだけで、篠原君の方はよう知つとったということかもし  
れん」

「ま、証拠はないけど一つの可能性ですね」  
学もあまり深刻に考えるのは止めたようだ。

「けど、サスペンス劇場のオチとしては一番盛り上がるんちやいます」  
しのぶが嬉しそうに言う。

「オチっていうなや。オチって」

「じゃあクライマックス？」

男達はなんだか馬鹿馬鹿しくなってきた。誰ともなく「あーあ」とため息をついた。

「やっぱホンマの事件の謎を解くいうんは無理があるわな。しのぶちゃんには  
ちよつとは期待しててんけど……」

「いや、まだ分からへんで」

ユウヤんが手に持ったコップをカウンターに置いた。

「ちよつと実験してみいへんか？」

悪巧みをする目付きでユウヤんは立ち上がるとカウンターを回り込んでし

のぶの背後に立った。

「えっ、なんですのん」

しのぶが忙しなく交互に首を振ってユウやんを振り返ろうとする。

「あっ、UFOや」

「えっ、どこどこどこ？」

ユウやんが指した正面を向いたタイミングを図ってユウやんは素早く銀縁メガネを両手で摘んで外してしまった。そのメガネを持った指先で器用にリボンの結び目を摘むとシュツと音を立ててほどく。意外に長い髪が無造作に解けてしのぶの顔を覆った。

「あっ」

しのぶが声を上げる。顔の前にふっさりとかかった髪をしのぶは強く首を振って左右に振り分けた。思いの外に大きな奥二重の瞳を焦点を合わせようとするかのようにしのぶは何度も瞬かせる。

学は生まれて初めて開いた口が塞がらないという体験をした。一瞬前まで目の前にいた中学生は消え失せて同じ席に二十歳の娘が座っていた。ポニーテールをほどこいた長い髪は緩いカールを巻いて胸元にかかっている。髪を後ろでまとめて強調されていた丸顔が今は頬にかかる髪で面長に見える。

「あの……」

しのぶが何か言いかけたが、畳みかけるような学の言葉にかき消されてしまった。

「い、今付き合ってる人とかいてます？ 初対面でこんなこと言うたら軽い奴て思わはるかもしれないけど、俺マジっすから。コクってもいいですよね？」

「あのかなあ学ちゃん、そういうコーナーやないから」

ユウやんが釘を差してしのぶに向き直った。

「しのぶちゃん、なんぞ意見ないか？」

「あの……、警察ではもう犯人が分かっているんじゃないでしょうか？ あとは証拠を固めるだけという段階にきてるんじゃないかなと思うんです」

「しのぶちゃんも犯人がわかってるんか？」

代表して主人が聞いた。しのぶはこくりと頷いた。

「状況を考えるとこの事件の犯人って、とても限定されると思うんです。そういう意味ではマスターの篠原さん犯人説はユウやんの説と同じでひとつ大事な条件が合わないのだから違っていると思います」

「大事な条件というのは何ですか？」

センセがグラスを脇に置いて本腰を入れて聴く態勢に入る。

「犯人は部屋のスペアキーを持っていると思うんです。でも、佐橋さんにとって篠原さんが初対面だとしたらスペアキーを渡しているはずがありませんよ

ね」

「どうして、スペアキーを持っていると思うのですか？」

「佐橋さんが刺された場所が玄関を入つてすぐのところだったから。もし部屋の外で待ち伏せして佐橋さんと一緒に部屋に入ったのなら、それからキッチンまで包丁を取りに行かなければなりません。その間家の主の佐橋さんが玄関で立ち続けているというのは不自然ですよ。この場合、もつと部屋の奥が犯行現場になると思います。玄関で佐橋さんを刺すには先に部屋に入つて包丁を持つてきて待ち伏せている必要があるんです」

「他の部屋で刺して玄関まで運んだいうことは……、ま、その出血量ではすぐバレるか」

ユウヤんが自己完結する。

「たぶん、佐橋さんがそんな朝早くからコンビニに行かなかつたら起こった出来事は全然違ったんじゃないかなってわたし思うんです。でも、佐橋さんのその行動が犯人を限定することにもなりました」

「あいつ律儀そうですからね。きつと朝飯の食パンが切れてるのに気付いて買に行つたんじゃないかな。ただでさえ早起きせんとあかんねんから朝飯くらい抜いても良さそうなもんやのに」

「で、しのぶちゃんにはスペアキーの持ち主に心当たりがあるんか？」

ユウやんが山菜の変わり種を注文しながら尋ねた。

「推理する拠り処が少なくてあまり自信はないのですけど……」  
言い迷うように唇をキュツと窄める。

「まあええやん。言うてみ」

「その人は佐橋さんと同棲されていた女性じゃないかと思うんです」  
「ぶっ」

バリキと学の兄弟が盛大にウイスキーを吹いた。

「いやいやいや。言うたら悪いけどお友達を作るのにも苦労してるような奴ですよ」

「でも、男女の仲はまた別だとわたし思うんです」

「その拠り処とやらを教えて下さいな」

センセが執り成すように尋ねた。

「引っ越しましたの葉書。ピザの注文。赤い歯ブラシです」

「お前、わかるか？」

バリキが学の肘を突つく。

「いや、さっぱり」

しのぶは猪口をくつと傾けて爛酒を煽ってから先を続けた。

「あの転居案内の葉書は学科全員の方に届いたんですよね。学さんの学科は何

人いらっしやるんでしよう？」

「たしか……、四十五、六人だったと思います」

「ピザの注文をしたとき佐橋さんは住所のメモを見ながら電話をして『まだ、住所が憶えられない』っておっしやったんですよね。わたし、あれれ？ っと思っただんです。佐橋さんは四十枚以上の葉書に手書きで新しい住所を書かれたはずですよ。いやでも住所を憶えてしまうんじゃないかしら。ましてや難関の入試をパスされた方ですから」

言葉を切ってしのぶはまた一口酒を呑む。

「わたし、その葉書の表書きをした人は佐橋さんじゃないと思うんです。誰か、四十枚以上もの葉書を厭わずに代筆してくれる身近な方がいらっしやったんじゃないでしょうか。ただ、ご家族の方ではありませんよね。引越し自体ご存じなかったみたいですから」

「それって……」

口ごもる学にしのは頷いた。

「学さんが歯ブラシの話がされた時もわたし、あれ？ っと思いました。空っぽのゴミ箱に赤い歯ブラシがひとつ転がっているだけっておかしいですよね」

「そ、そうすか？」

学は完全にしのぶのペースに嵌まっている。

「佐橋さんが説明された通りのことを頭の中でなぞると、やっぱりおかしいです」

徳利から猪口に燗酒を移し、猪口をその小さな唇に当てて酒が流し込まれる。小さな喉が小気味良く動く。その一連の美しい動作に学は見とれてしまった。「まず、空っぽのゴミ箱があります。佐橋さんが赤色の歯ブラシを下ろします。歯ブラシが入っていたケースがゴミ箱に捨てられます。学さん達が見たときには歯ブラシしかなかったので、赤い歯ブラシを捨てるまでにゴミの日が来たのでしよう。ケースはゴミの収集に出されてもう一度ゴミ箱は空になります」

また一口、燗酒がしのぶの喉を通過する。

「佐橋さんは何度か使う内に赤い歯ブラシが気に入らなくなって捨ててしまいます。そして、今度は緑色の歯ブラシを下ろして使い始めます。だとすると、ゴミ箱の中に足りないものがありますよね」

「緑色の歯ブラシのケースがないな」

ユウやんの言葉にしのぶが頷いた。

「学さん達をご覧になった状態にゴミ箱がなるのは、二本の歯ブラシと一緒に下ろされてケースが二個捨てられ、ゴミの収集日にケースを出した後で赤色の歯ブラシだけが捨てられた時です。だから、元々歯ブラシは二本並んでいたんじゃないかなと思うんです。きっと、佐橋さんの代筆をされた方は歯ブラシを

仲良く二本並べるような生活をともにされていたんじゃないでしょうか」

「女やな」

呟くユウやんの前に白い鉢が置かれる。拍子木に切った野草の茎に濃い緑の粒が塗されている。

「独活どくわつの木の芽和えや。相当クセがあるから、好き嫌いも分かれるところやけど、ユウやんは気に入るんじゃないかなって思うてるねん」

主人の説明を聞きながらユウやんは独特の香りのする木の芽和えを箸で摘んだ。口に入れると清涼感のある奇妙な香りが口一杯に広がって目を丸くする。

「うわっ、変わつとるな。ハツカとも違うけどすうすうしよる。確かに好き嫌い分かれそうな味や」

言いながらユウやんはクセになったようで、焼酎との相性を楽しむように交互に口に運ぶ。

「それで、別れ話が拗れて傷害事件に発展したというわけですか」

センスの前には大振りの碗にあさりの潮汁が出された。あさりとしめじ、白葱で出汁を取って塩と酒だけで味付けしたシンプルな椀物だが、味のごまかしが利かない分、素材の吟味が腕の見せ所になると主人が自慢する。一口飲むと海の強い香りが口中に広がってなんとも贅沢な気分になった。

「口に入れる歯ブラシをゴミ箱に捨てるというのは、もう使わないというサイ

ンです。だから、二人が別れてしまったか、佐橋さんは別れるつもりなんじゃないかと想像するのが普通だと思います」

しのぶの言葉を聞きながら学は手の中でショットグラスを弄んだ。

「なんか切ないっすね。葉書四十枚以上代筆するって、並大抵の思いじゃないのに……。きっと尽くすタイプの娘やろうになんで別れるかなあ」

「でも、本当はそうじゃなかったら良いなあってわたし思うんです。ここからは、ホントにわたしの空想なんですけど別の可能性をもう少し話してみても良いですか？」

「ぜひ、聴きたいです」

「金曜の夜に突然篠原さんから電話があって今から行くと言われた時、佐橋さんはとても慌てました。その女性はたまたま居合わせていなかったけれど、部屋の端々に彼女の足跡が残っています。彼女の私物をいっさいがっさい放り込んで鍵をかけたのが即席の開かずの間です。佐橋さんにしてみれば、初めて訪ねて来るクラスメイトに実は女の人と暮らしているって知られるのはバツが悪くて何としても避けたかった。けれど時間があまりにも短過ぎて仕舞い忘れた物もありました。歯ブラシだけじゃなくて、その気になればもっと変なものが見つかったかもしれない」

少し考え込むようにしのぶは黙ってから、やおら言葉を続けた。

「ピザの注文をするために住所のメモを取りに行つて歯ブラシに気付いた佐橋さんは慌てて彼女の方を深い考えもなしにゴミ箱に捨ててしまった」  
心なしか猪口を持つしのぶの手に力が入る。

「日曜の朝、彼女は佐橋さんがコンビニに行っている間に戻ってきて部屋の有り様に驚きます。自分の痕跡が悉く消されていることを知ってパニックになつてしまいます。起きてしまった事件から逆説的に考えると二人の関係があまり巧くいっていなかったか、彼女の気持ちに余裕がなかったことが窺えます。でなければいきなり問答無用で刺すというのは極端過ぎますよね。わたし、なんとなくダメを押してしまったのが、そのゴミ箱の中で一つぽつんと転がっていた歯ブラシのような気がしてたまらないなあって思いました」

「確かに、不安でいっぱいいっばいなどころで見せられるには切ない光景やな」  
バリキがウイスキーを煽る。

「もし本当に二人が喧嘩していたり別れようとしていたわけじゃなくて、わたしが想像したみたいに行き違いがあつただけだとしたら、日曜の朝、二人はなんて間の悪いすれ違いをしちやっただろうって思います。もし、佐橋さんがコンビニに出掛けていなければ、あるいは彼女が来るのがもう少し遅ければ、佐橋さんが状況を説明して全部笑い話になつたはずなのに……」

しのぶは徳利の残りを猪口に移して一息に煽った。酒を飲み干してから、そ

の小さな唇の端が笑まし気にあがる。

「でも、もしわたしの想像が当たっていたら佐橋さんが亡くならなかったことは本当に不幸中の幸いだったと思います。だって仲直りをするチャンスが残されたんですから。穿った考え方をすると、佐橋さんが事件のことを憶えていないって警察に説明しているのも、彼女を庇ってあげているのかもしれない。佐橋さんは彼女と仲直りをしたがってるんじゃないかって、そう考えると少しだけ気持ちが温かくなります」

しのぶは徳利を差し出して主人にお代わりを頼んだ。

「ま、あとは警察があんじょうやってくれる話やろうけど、呑み屋の話としては今のしのぶちゃんの説が一番気持ちが悪えな」

ユウヤんはいいながら、カウンターを回ってメガネとリボンを返した。

「しっかし、一月の時はたまたまか思うだけそのメガネとポニーテールって、どないな仕掛けになってるんやろな。何かのスイッチみたいやで」

「わたしにもよく分からないんです。独り暮らしだから家では確かめようがないし、出掛けるときはメガネもポニーテールも外しませんから」

「あの」

ウイスキーを空にした学がいきなり立ち上がった。

「いろいろありがとうございました。それにいろいろ失礼なこと言うてすみま

せんでした。正直何も期待してなかったし、ただの飲み会のつもりで来たんですけど、なんか気持ちちが吹っ切れたというか、めっちゃすっきりした気分です。来て良かったってほんとと思います」

そう言っつて学は几帳面にお辞儀をした。そろそろ京都に戻らないといけな時間だという。

「あの、さっきの葉書は警察に見せた方が良いでしょう。しのぶさんの推理の通りやったら指紋が残っているかもしれないし」

ふと気付いたように学は言った。しのぶはちよつと小首を傾げながら「ええ、そうですね」と答えた。カウンターの面々と挨拶を交わして駅まで送ってくるというバリキと一緒に学は酔鏡を後にした。

「ええ店やろ」

春の夜風が心地好く二人の頬を撫でていく。

「ああ」

「ええ店の必須条件は三つあるて先輩に教わったことがある。『ええ店主』、『ええ常連』、『旨い酒と肴』や。けど、俺はもう一つ条件があるんちゃうかて気がしてる。『気持ちのええおしゃべり』や。愚痴や人の悪口で呑む酒くらいいますいもんはないで」

「そやな」

心地好いとはいえ四月の夜はまだ肌寒い。バリキは大型犬が毛に付いた水を振るい落とすように大きく身震いをした。

「遙ちゃんて、ええ娘なんやろ」

また唐突に切り出す。学は鬱陶し気な顔をしてそっぽを向こうとした。が、思い直したように話しだした。バリキの方には向かず目はじつと遠くに見える駅舎を見据えている。

「姐御肌いふのかな。グループができるとすぐリーダーに担ぎ上げられるタイプやねん。頼られるとイヤとよう言えんらしいねんな。家の事情がややこしくてな、小六の時に母親が男作って蒸発したんやて。それがトラウマになってるんかもしれん。大勢の友達に囲まれてても独りぼっちで取り残されるんちゃうかっていつつも顔に出てるんやわ。あの子が携帯持たへん理由が笑えるねん」

言いながら学の口元に笑みは浮かばない。何やら酸っぱいものを口に含んだような顔付きになって先を続けた。

「携帯を持ったたら鳴るのをじつと待ってそうで嫌やねんて。それで、一日誰からも電話がなかったら落ち込みそうで怖いねんて」

「まあ、固定電話やったら出かけてる間に鳴ったかもしれんて思うこともできるわな」

バリキの言葉に学は頷いた。

「うちも親が早うに死んだし、なんとなく惹かれる気持ちもわかるけどな」  
ウイスキーの酔いをほぐすようにバリキは腕をぐるぐる回しながらのんびりと言った。

「思い込みの激しいところもあるし、気持ちに余裕がないやつちやなあてしよつちゆう感じるけどなんかほつとかれへんねん」

二人は黙って駅の階段を上がっていく。九時を過ぎた改札はそれでも帰宅を急ぐ人々で賑わっていた。自動改札を通り過ぎたところで学は振り返った。そこだけ時間を止めたかのように彫像のようなバリキの体躯が立ち尽くしていた。

「兄ちゃん」

「ん？」

「ありがとうな」

言って学は背を向けるとホームへの階段を駆け上がって行った。

「あれ、なんでまだメガネ外してるん？」

バリキが店に戻るとしのぶは髪もメガネも戻さずに猪口を傾けていた。

「何か続きの話があるそうですよ。で、武装解除せずにバリキが帰ってくるの

を待っていたのです」

「ホントは憶測で話すことではないとわかってはいるんです」

言い訳するように猪口を見つめながらしのぶは言った。

「でも、あの葉書を学さんが警察に持って行くとおっしゃったのでやっぱり言うだけ言った方がいいかなって」

「なんやろ？」

バリキがユウやんの隣に座りながら訊いた。

「一つ気になっていいることがあるんです。どうして日曜のそんな朝早い時間に彼女はやって来たんだらうって。普通、まだ寝ているか起きたばかりの時間ですよね」

「付き合うとったんが水商売関係やったんちやうか？ やったら丁度ご帰宅の時間やろ」

「わたしもそうかなと思っただけですけど何だかしっくりこないんです。佐橋さんと彼女——Aさんと呼びますね。Aさんがどんなきつかけで知り合ったのかは分かりません。でも、二人が惹かれ合った理由は少し想像できます。佐橋さんはご家族の中で孤立していて、たとえそれが思い込みであるにせよ何年も孤独を味わって暮らしてきました。Aさんも佐橋さんを刺してしまった状況を考えると、今まで尽くしてきたことに対する裏切りを恨んだというよりはパニッ

クを起こして衝動的に刺してしまったという印象が強いです。まるで独りぼつちにされるのを怯えたみたいに。ですから、二人が惹かれ合ったのは孤独を癒すためというか、独りぼつちから逃げ出したいという想いが気持ちの底にあつたんじやないかなって思うんです」

「水商売の女にはそぐわん言うんか？ そら偏見やと思うで」

「いえそういうことではなくて、佐橋さんは模範的な学生で授業をずる休みすることもないと学さん仰ってましたよね。だったら生活のリズムは朝起きて昼間は学校に行つてマンションにはいません。夕方、マンションに帰ってくる頃、Aさんが水商売をされているとしたらそろそろ出勤時間です。そして帰ってくるのは明け方。もしお二人が独りぼつちになりたくないからと一緒に暮らし始めたのだとしたら擦れ違つてばかりのその生活つて変ですよ。だからわたし、Aさんは佐橋さんと同じ生活のリズム——朝起きて、昼間活動して、夜には家にいるという生活をしているんじゃないかなと思うんです」

しのぶの前には黒い小鉢にじゃこをぬらつとさせたような魚が盛られていゝる。のれそれ同様高知の名産でドロメと呼ばれるらしい。こちらはクチコイワシの稚魚で口一杯に海の香りが楽しめる。

「春はやっぱり魚と野菜が楽しいと俺は思うで」

主人は六甲の水を啜りながら得意気に説明した。

「そうすると日曜の朝、六時過ぎというのはやつぱり早過ぎます。もしかしたら、どうしても急用があつて朝の六時過ぎから来られただけかもしれない。でも、可能性の問題として論ずるならそれは否定できない一つの可能性です。でも、同じ可能性というならもう一つの可能性の方がわたしは気になるんです」

「もう一つ？」

おうむ返しするバリキを見つめてしのぶは頷いた。

「朝早くに行かないと佐橋さんが出かけてしまうことをAさんが知っていたという可能性です」

しのぶは話を切つて猪口を口に運んだ。

「もしも佐橋さんがハイキングに参加することを知っていたとしたら日曜の訪問には特別な意味があつたんじゃないでしょうか？」

「『あたしというもんがありながら、別の娘と遊びに行くんかい』ってねじ込みに来たんか？　けど、それやったら佐橋が遊びに行くて話を聞いてすぐに電話掛けるんが普通やろ」

ユウやんの言葉にしのぶは楽しそうに笑つて首を横に振つた。

「その逆です。佐橋さんがハイキングに参加すると決めたのは前日の土曜日、それを人伝てに聞いたとしたらAさんはそのハイキングの関係者です」

男たちにもしのぶの言うAさんが誰なのか想像できた。

「佐橋さんが参加すると知ってAさんは一つの計画を膨らませます。明日の朝、いきなり訪ねて行って佐橋君を驚かせてやろう。実は私もそのハイキングに参加すると知ったら彼はびっくりするだろうな。それから二人で一緒に待ち合わせ場所に出掛けよう。彼の手を離したくなかったAさんはこれを機会に交際宣言してしまつて揺るぎない二人の仲を築きたかつたんじゃないでしょうか？」

しのぶは猪口を口に持つて行きかけておや？ という顔付きになつた。空になつていたらしい。

「日曜の朝、Aさんはうきうきとした気分です。五時過ぎに起きるとお洒落をして六時過ぎに佐橋さんのマンションに着きます」

徳利から猪口に酒を移しながらしのぶは話を続ける。

「スペアキーで部屋を開けて入ると佐橋さんは生憎の外出中。きつと律儀な彼のことだから朝御飯でも買いに出掛けたんだらうと考えて勝手知つたる部屋の中をうろうろします」

しのぶは一口爛酒を喉に流し込み、遠くを見つめるように目を細めた。

「そして間の悪いことにゴミ箱の中の赤い歯ブラシを見付けてしまふのです。一瞬にして楽しい気分は消し飛んで彼女の心に怯えが走ります。どうして内気で人見知りな彼は二つ返事で女の子達とのハイキングに行くと言つたんだらう？ キッチンに並んでいるグラスの洗い物、ピザの空き箱は誰かが来たこと

を示している。冷蔵庫に買っておいしたチーズやハムを彼は何の躊躇いもなしにその来訪者に出したのだろうか？ 少し思い込みが激しくて性格に余裕のないところがある彼女の心は一気にパニックを起こします。そして、ゴミ箱の中の赤い菌ブラシは彼女にこう告げているように見えたのです『お前は捨てられたんだよ』って」

ユウヤんとセンセは呆気にとられてしのぶを見た。隣でバリキは黙り込んで何かを考えている様子だった。

「ハイキングに参加する女性の中で佐橋さんが参加することを知らされたのは遥さんです。そして日曜の朝に集まった他のメンバーは遥さんから聞いていないと言いました。警察の捜査が入っている時です。遥さんの証言を取ればすぐに嘘とバレる危険性があることです。ですから彼女達が嘘をついているとは考えにくいのです。ですから、ハイキングの参加メンバーの中にAさんがいるとしたらそれは遥さんしかいません。それに、佐橋さんの同居人が遥さんだとすれば、学さん達が佐橋さんを訪ねて行った夜、そこに居なかった理由もわかる気がするんです」

「どういうこと？」

ユウヤんが首を傾げる。

「遥さんはハイキングの幹事です。イベントを明後日に控えて連絡の付く場所

に居ないといけなないと考えたんじゃないでしょうか。それで自宅に戻っていたんです」

「いやいや今日日……、ああっ」

「ええ、遙さんは『今どき携帯も持たない古風な』方です」  
しのぶは言って盃を干した。

「独りぼっちになる怖さはわたしも知ってます」

呟くような声でしのぶは言った。

「学さんのことがなければ、わたしは寧ろ早く警察が犯人を見つけ出してくれることを祈っています。一人で膝を抱えて震えてるんじゃないかって考えるとまらないから。でも……」

しのぶは徳利を脇に置いてバリキに向き直った。

「わたしの推理はあくまでも可能性の一つです。でも、否定できない可能性でもあります。学さんが葉書を警察に提示して、もしその通りの事実を知らされるところでしたらそれはそれであんまりだと思いませんか」

グラスを睨むようにして黙り込んでいたバリキはポケットから携帯電話を取り出した。

「ちよっと待ちやバリキ。事がはっきりしてホンマにその通りやったらあんじよう慰めてやればええ話や」

ユウやんの言葉にバリキの手が止まる。

「そないに先回りして学くんを構うのはちよつと過保護過ぎちゃうか。生きとつたら失恋の一つや二つ誰でもするわいな。けど、痛い目見た経験は絶対あとで生きてくる」

「私もそう思いますよ。正月の時の娘たちへのアドバイスのお返しをするわけじゃありませんがバリキは少し学くんを構い過ぎてやしませんか？ 彼は両親のいない負い目を背負って君が善意から構ってくれていることは痛いほど理解していますよ。でも、その想いが彼を束縛しているように私には見えません。だから今彼は君に依存もできず、独立もできず、苦しんでいるんじゃないでしょうか」

口幅つたいことを言ったと、センセは恥ずかし気な顔をしてまた咳払いをした。

「一度、完全に手を離しておやりなさいな」

今日はこれでおしまいというようにセンセは甑こしきだお倒しの残りを飲み干した。

「今度はいつペン一人でここにおいでと言うたってや」

カウンターの向こうでグラスを磨く主人がバリキの方を向いてにっこり笑った。